

## 日本語的的確な使用のために(第八版 序)

一九四三(昭和一八年)刊行の『明解国語辞典』以来の伝統を有する『新明解国語辞典』は、一九七二(昭和四七年)の初版以降も改訂を重ね、今回その第八版を送り出すこととなった。第八版は、『新明解国語辞典』の初版から編集に関わり、二〇一二年の第七版で編集代表も務めた倉持保男の先導のもとに順調に進んでいたが、いよいよ終盤に入ろうとする二〇一八年八月にその船頭を病で失うという思わぬ事態が生じた。当惑の極みであったが、万やむを得ず、私に取りまとめ役を引き受け、編集委員と三省堂の担当者が一体となって完成に向けて取り組むこととなった。

残された時間から見ても、倉持前代表のときに立てていた基本方針を着実に実現させることがその任務と考えた。すなわち、『新明解国語辞典』の当初からの特徴である、ことばの本質をとらえた鋭い語釈と、それを裏付ける適切な用例を一体化して提示すること、これを本辞典の中核に据えた。辞書としての要だからである。それと同時に、一時期話題になった、あまりにも個人的な語釈は、必要に応じて修正をするという立場も受け継いだ。第七版で新設した「文法」欄は、接続情報を中心に、分かりやすい表現で充実させた。第六版から待遇表現などに設けていた「運用」欄も詳しくした。いずれも、語義、語釈を補完する機能をもつ。語釈と「文法」と「運用」、この三点セットにより、本辞典が日本語的的確な運用に役立つものと信ずる。

本書の特徴の一つは、漢字表記にある。といっても、語義に応じた漢字の使い分けの傾向を細かく示すことは初版以来しておらず、むしろ史的に用いられてきた漢字表記を実証的に提示するという姿勢を取り続けてきた。「表記」欄がそれで、旧表記、代用字や義訓、借字などの情報を中心に、仮名表記についても触れている。第八版でもこれを一層進めた。これらは、やや古い資料を読み解く上でも役立つに違いない。

「一本、二枚、三冊」などの「かぞえ方」欄も第四版以来のものであるが、これも再点検をして拡充した。それと連動して、「一本イッポン、二本ニホン、三本サンボン、四本よんホン、五本ゴホン、六本ロツポン（ロクホン）、七本なホソ（シチホン）、八本ハチホン（ハツボン）、十本ジツポン（ジュツボン）」などの「数字の読み方」を付録に加えた。これは代表交代後の新たな試みである。

見出し語にアクセントを付しているのも『明解国語辞典』以来の特徴であるが、今回、第七版の全体を見直し、より時代に合ったアクセントに改めた（付録「アクセント表示について」を参照）。また、たとえば「ざらざら」は、以前はまとめて「**①①**（副）する」と表示して用例を分けていなかったが、「**■①**（副）する…：「表面が―した紙」、**■①**（副）する…：「手が荒れて―になる」」のように分け、用法に応じたアクセントの違いを示すようにした。さらに、見出し項目以外に、その下位項目にも紙幅と時間の許す限りアクセント情報を補った。その結果、九万語超のアクセント辞典としても使えるものとなったはずである。

時代に即した国語辞典として、新項目も多数採用した。今、正にその渦中においてこの序文を執筆しているのであるが、新型コロナウイルス関連の新語が多くなったのも当然であろう。全員の命に関わる事柄なのに、一部の人にしか意味の分からないカタカナ語が多用されるのは、「ハザードマップ」など、いやそれ以前からの流れがますます加速していることを意味し、取返して刺激を与えるためという効用を仮に認めたとしても、なお考えるべきものと思うが、辞書の役割としてはそれらを分かりやすく解説するしかない。

この第八版が広く世に受け入れられ、読者の声が第九版への進展に繋がることを願ってやまない。

二〇二〇年六月一日















